

要 旨

国語科教科書の原文理解を促進させる一手段としてのリライト

——ろう学校小学部中学年の重度ろう児を対象に——

山口 鈴子

近年、障害等級3級以上とされる先天的重度ろう児は、音声情報を知覚しないため、視覚言語である日本手話を母語＝第一言語として獲得し、書きことばである書記日本語を第二言語として習得することが指摘されるようになった。しかし、彼らの書記日本語による学業成績は小学校3・4年生水準で停滞する傾向が見られ、高校卒業時点においても、従来から言及されてきたろう児全般に見られる「9歳の壁」を引き起こすことが示唆されている。とりわけ日本語への依存度が高い国語科においては、その傾向は顕著になると推測できる。

この点に対し、日本国内に居住するJSL児童・生徒を対象に、日本語レベルに応じて国語科教科書の本文を書き換えることで文章読解を円滑にする光元・岡本・湯川(2006)によるリライト教材の活用が提案されており、阿部(2008)と河野(2010)はろう児を対象とした実践研究を通してその有効性を提示した。しかし、重度ろう児を対象とした国語科教科書の「読み」能力の育成に焦点を当てた研究は少なく、その効果的な日本語指導案は十分に検討されていない。そこで、本論では、重度ろう児に対するリライト教材を用いた新たな指導案を考案し、彼らの「読み」における有効性について考察した。

まず、1. で、重度ろう児の書記日本語の「読み」における問題点と、その解決策の一つとしてのリライト教材について述べ、本論の目的とその調査方法を明らかにした。次に、2. で、1. に関する具体的事項である(1) ろう児の言語・学習発達、(2) 小学部のろう児の「読み」における問題点、(3) (2) における問題点の打開策について、従来の研究から検討を加えた。その後、3. では、聴覚障害が重度ろう児に与える影響について考察し、重度ろう児は言語習得において独特な発達過程を辿る

点、ろう児全般に見られる「9歳の壁」と重度ろう児に見られる「9歳の壁」は要因が異なり、後者は生活言語能力と認知学習言語能力の差異により生起する点、外国語副作用的要素を持つ可能性がある点を指摘した。また、ここでは、日本語文の理解に困難を示すろう児の「読み」におけるプロセスを読み手要因とテキスト要因に分類し、それぞれ①ワーキングメモリ（作動記憶）、②音韻的符号化、③既有知識（スキーマ）、④メタ認知の4と、①語の認識、②フォニックス、③流暢さ、④語彙、⑤統語、⑥比喩言語の6の計10にまとめた後、重度ろう児を対象とした現行の小学校・ろう学校小学部の学習指導要領における国語科の「読み」の課題点についても明らかにした。続く4. では、既存のろう児に対する日本語指導案を参考にし、1～3. の結果をもとに、対象者と指導内容をより具体的に定めた新たなライト教材案を考案した。その後の5. では、現場における4. の教材を用いた日本語指導案を作成した。その有効性を検討すべく、14校のろう学校に作成した指導案の試行を依頼したが、コロナ禍の深刻な影響もあり、スケジュール調整が困難である、感染症対策のため外部からの来校者を制限している等の理由により、今回は試行がかなわなかった。最後に、6. では、今後の課題として、外国語副作用的側面の再考、文部科学省（2017 a）における音読要素・「書き」要素の考慮、書き換えに対する教師の負担、現場における指導案の有効性、といった5点を指摘した。